

万葉集二六七五番歌「立てば継がるる」について

小山, なかば

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

67

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

61

(発行年 / Year)

2003-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009925>

万葉集二六七五番歌「立てば継がるる」について

小山 なかば

はじめに

君が着る三笠の山に居る雲の

立てば継がるる（立者継流）恋もするかも

（卷十一・二六七五）

右は万葉集卷十一、二六七五番歌である。この歌は、新編日本古典文学全集『万葉集』（小学館）、『万葉集注釋』（澤瀉久孝）、『万葉集釋注』（伊藤博）『万葉集全注』（稲岡耕二）など、現行の注釈書類においてほぼ同様の解釈が示されており、特に問題は無いように見える。

新全集

……雲が立つてはまた涌き出るように絶え間

無い恋さえもすることよ。

『万葉集注釋』

……雲の立ち登つてはまたあとから繼いで来

るやうに、あとからあとからつづいて絶えない戀をすることよ。

『万葉集釋注』

……雲が立てばまた涌き出るやうに、あとからあとから燃え立つせつない恋をしてい

る。

『万葉集全注』

……雲のやうに次々と湧き起こつてやまない

切ない恋をすることです。

ところが新全集『万葉集』の頭注に、次のような記述がみられる。

継ガルルは、ルルが自発を表し、思い続ける意だが、それに立テバという条件を置くことの理由は不明。山部赤人の「高座の……」(三七三)はこれの類歌だが、そのほうがわかりやすい。

このように疑問点を明らかに示したのはこの新全集のみである。しかし解釈においては「雲が立つてはまた涌き出るように絶え間ない恋さえもすることよ」というように他とほとんど変わりはなく、疑問に対する明確な解答が出ないままとなっていることがわかる。

それでは、「立てば継がる」という表現のどこに問題があるのか。

「条件を置くこと」の理由は不明」というのは、このままでは「継がる」を起こす契機として「立てば」という条件を与える必要がない、ということであろう。つまり現行の解釈では「立てば」という条件表現がその役割を果たしておらず、なぜわざわざ置かれているのかが不明なのである。

そこで本論では、問題は立ツと継グという二つの語の關係にあるとみて、新たな解釈を提出しようとするものである。

一 類歌について

まずはさきほど引用した新全集頭注の後半部分にも挙げられている類歌と比較してみたい。

高座の三笠の山に鳴く鳥の

止めば継がる(止者継流) 恋もするかも

(巻三・三七三)

類歌である巻三の三七三番歌は、三笠の山に鳴いている鳥の声が止んではまた繰り返される、そんな絶え間ない恋をしている、といった内容であり、解釈も一定しており問題はない。なぜ「断れば継がる」では都合がわるく、類歌は「わかりやすい」といわれるのだろうか。

類歌では当該歌と同様に、動詞止ムの已然形にバが付いた確定条件であるが、「止めば継がる」は鳥の声が止ムという条件を受けて、鳴き止んだ鳥がまた鳴きはじめる、という結果をはつきりと読み取る事ができる。「立てば継がる」においても何らかの条件を提示し、その条件下での結末が表されるべきである。

山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』(有精堂・一九七二)に次のようにある。

前句が後句の情態を示しているような形式が、両句の内容である二つの事態の因果性が問題にされる段階に至って、条件表現の形式へと転じたのであった。そうすると、前句の内容は、後句の内容と一応独立して考えられるような事態でなくてはならない。

また「条件関係の認識が成立するためには、その前提とし

て、因果性の認識が存在しなくてはならない」とも述べられている。このように、条件句が成り立つためにはバを挟んだ前句と後句の間に何らかの因果関係が必要である。つまり前句立テバと後句継ガルとの間に因果関係が認められないことが問題であるといえる。

木下正俊『万葉集語法の研究』（瑞書房・一九七二）では、「具体的な多くの事実を帰納して、諺・定義・習慣などの超時間的な事実を表す」条件表現の例として次の歌を挙げています。

常陸なる浪逆海の玉藻こそ引けば絶えずれ

……（巻十四・三三九七）

当然ながら、ここには回想もなければ予想もない。そのためここには常に呼応が存する、というよりも、呼応などを論ずる対象となりえない、という方が正しかろうか。

こう述べられているように、玉藻を手で引つ張ればちぎれる（絶える）というのは当然の事実であるし、鳥が鳴き止めばまた鳴きはじめるということも同様である。

已然形十バの条件句をなす場合、絶ユー生ユまたは止ムー継グというバを挟んだ前句ー後句の間には、極端に言えば逆の意味を示すといえるほどの距離がなければならぬ。「立てば継がる」に疑問が生じた原因も、立ツと継グという二つの動作の間に因果関係が認められないからであると考えられる。

そこで本論では前句「立ツ」を動詞「断ツ」との掛詞であると考え、「断てば継がる」としての解釈を提案したい。

二 立ツから断ツへ

まず問題の箇所を表記は「立者継流」である。先ほどから「たてばつがる」と訓んでいるが、この訓み方に問題はないのだろうか。

『万葉集全注』に「略解にタチテハツゲルと改めたが、諸注のほとんどが旧訓の通りに訓んでいる。それが正しいと思う。」とあるように現在のところ揺れはなく、「タテバツガル」とみて間違いないうだ。しかし略解でタチテハツゲルと訓まれているのを見ると、やはり「立てば継がる」という語形に違和感を感じていたのではないだろうか。一方の類歌の表記は「止者継流」であり、当該歌と全く同じであると言つてよい。その類歌の訓みは「ヤメバツガル」で一定しており、こちらの問題はない。

仮にこれらの表記で「タチテハ」「ヤミテハ」と訓むにはテを読み添えなければならぬが、他にテハを含んだ歌を音仮名表記以外の巻から見ると、「而者」で表記しているもののみられる。

汝が父に似ては鳴かず（似而者不鳴）……（巻九・一七五五）

継ぎては言へども（継而者雖云）……（巻十三・三二五五）

これらテを表記した例を見ると、いずれも似ル十鳴ク、継グ十言フという二つの動詞がつけられた形である。この点で当

該歌、類歌と同形であるが、「立者継流」では「而」が表記されていないため、「立ちテハ」と訓むのだとは考えにくい。よって表記の面からも訓みはタテバツガルで問題はないといえる。

それでは、立ツを掛詞と考え、断ツへと転換させることにどのような意味があるのかを検討する。

「立てば継がる」の一番の問題点は、立ツと継グとの因果関係が明白でないところにあった。前句は後句「継がる」を引き起こす原因として機能しなければならぬ。では継グのためにはその前にどのような動作が必要なのだろうか。

①…白雲の絶えつつも継がむと思へや

……（巻十四・三三六〇或本）

②…それ破れぬれば継ぎつつも……

緒の絶えぬればくくりつつ

……（巻十三・三三三〇）

①は当該歌と同じく雲をうたつた歌であるが、この場合絶えによつて雲が途切れるからこそ「継がむ」と願うことができるのである。②は長歌の一節であるが、速く離れた妻を想い、衣であるなら破れたら継ぎをするのに、緒が切れたらくくりつつことができるのに、というように離れてしまった苦しさをうたっている。逆にいえば破れていない衣は継ぐことができないうし、もともと切れていなければくくりつつもできないのである。

他にも言ヒ継グ、語り継グ、聞き継グなどの例が多くみられるが、いずれも複合動詞化しているともいえる。これらの例もある人が語る言葉が次の人が受け継ぎ、また次の人へ受け渡す意味を示すと考えると、先に述べた継グのもつ機能と合致するとみてよいだろう。

ところが「立てば継がる」では、前句はもくもくと立ち昇る雲を意味しており、いったん途切れるということがない。類歌「止めば継がる」がわかりやすいと言われるのは、継グという後句を引き起こすための前句が、鳥の声がいったん途切れる意味の「止ム」だからである。

ところで最初に挙げた注釈書類のほか、日本古典文学大系『万葉集』だけが大意として次のように示している。

古典文学大系……雲が消え失せるとすぐかかつて絶えない

ように、止む時もない恋をすることである。

このように「消えうせると」と他とは逆の解釈をしているが、特にその理由は述べられていない。おそらく類歌からの類推かと思われるが、これをみても「消えうせる」、すなわちいったん途切れたものがまた継がれる、と解釈するほうがより自然であるということがわかる。

そこで「立てば継がる」を断ツと読み替えることによつて「止めば継がる」と同様に一度途切れるとまた続く、という意味となり、因果関係が明確になる。つまり立テバという条件

を置く意味がある、と言うことができるかと考える。

×雲 — 立つ — 継ぐ

←

○恋 — 断つ — 継ぐ

○鳥 — 止む — 継ぐ

次に表記の面から検討を加える。「立てば継がる」の表記は「立者継流」であるが、上からの意味は「雲が立つ」である。その立つという語が転換され「恋心を断てば」として下へと続く。このときの表記は転換前の「立」の字を用いていることになる。このように掛詞となる語の変換前の意味が表記上優先されることがあるのだろうか。

㉞…泊瀬の山に降る雪のケ長く恋ひし君

雪が消える (消長) ↓日が長い
… (卷十・三三七)

㉟…人江の薦をカリにこそ我をば… (卷十一・二七六六)

薦を刈る (刈尔) ↓仮に

…夕テば継がるる恋もするかも

雲が立つ (立者) ↓断てば継がるる恋

例㉞は雪が消える意味の「消(ケ)」が転換して日数を表す

「日(ケ)」となる。このときの表記は「消」であり、転換後の「日」よりも上からの意味である。「消」のほうが表記上優先されていることがわかる。㉟も同様に薦を刈り取る意味の「刈り(カリ)」が同音の掛詞として「仮(カリ)」へと転換しているが、その表記は上からの意味である「刈」をとっており、「立てば継がる」の場合も表記が「立」であっても「断つ」へと転換した可能性が十分考えられる。

掛詞というたとえば植物の「松」と人を「待つ」といった名詞によるもの、「竜田川」と「立つ」のような地名を用いたものはすぐに思い浮かぶ。しかし今回提案するのは立つ↓断つという動詞から動詞への掛詞ということになるが、こうした動詞間の掛詞も万葉集中にみることができ。

㊿…打ち麻懸けウム時なしに

恋ひ渡るかも (卷十二・二九九〇)
麻を績む (続時) ↓捲む時なし

㊿…まそ鏡カケて惚ひつ逢ふ人ごとに (卷十二・二九八一)

鏡を掛ける ↓ (懸而) 懸ける

㊿…川岸の妹がクユべき心は持たなじ (卷三・四三七)

川が崩ゆ ↓ (可悔) 悔ゆべき心

まず㊿では乙女たちが麻糸を紡ぐ意味の「績む」から、同音

を利用した掛詞として捲意を意味する「捲む」へと転換する。このときの表記は先ほどの㉔㉕と同じく上からの意味である「續む」を表す「続」字がとられている。

次の例①は新全集の解釈に「まそ鏡のようにかけて―事寄せてあの人を偲んだ」とあるように、鏡を壁などに掛けるという「掛く」と、関連させる、結び付けるといった意味の「懸く」との掛詞である。㉖でも河岸が崩れる意味の「崩ゆ(クユ)」という音を利用して、後悔を表す「悔ゆ(クユ)」へと転換されており、いずれも動詞間の掛詞となっている。ただし①㉖の表記は㉔とは逆に上からの意味が優先されており、表記においては厳密な決まりはなかったともいえる。しかし動詞間の掛詞で上からの意味を表記上優先した例は皆無ではないし、立ツを断ツとの掛詞であると考えることによって問題とされていた因果関係が明確になることは確かである。

三 序詞について

立ツを断ツとの掛詞とみなすことによつて、当該歌の持つもう一つの問題である序詞についても一つの読み方が提案できる。序詞の判断の場合、その歌が序歌であるかどうかの選定にも出入りがあるが、当該歌、類歌ともに序歌であることは一定しており、従つてよいと思う。ここで問題となるのはどこまでが序詞であるかということである。

A 〈三笠の山に居る雲の〉立てばを起こす序

B 〈三笠の山に居る雲の立てば〉継がるるを起こす序
〔釋注〕・全注・日本古典文学全集

(日本古典文学大系)

序詞の判定には、右のように三句目「居る雲の」までを序とするAと、「立てば」までが「継がるる」を起こす序であるとするBの二つがある。最も伝えたい核となる部分は「立てば継がるる恋」である。その恋の内容を示すための立ツを引き出すために「雲」が用いられていると考えると、A説が妥当であろう。

類歌の場合「鳴く鳥」が核となる「止めば継がるる恋」を導く序として機能しているが、止ムという語に転換はなく単純な構造であるともいえる。しかし本論は立ツと断ツとの掛詞であると考えるため、核となるのは「断てば継がるる恋」である。

それを導く第一段階として、雲は立ち昇るものであるという発想から「……雲の」までを「立つ」を起こす序とする。さらに第二段階で「立つ(タツ)」の音を利用して「断つ」へと転換することになる。そのためこの二つのタツの間には解釈上の関わりはないと考える。したがって「立つ」と「継がるる」をつなげることはできないため、「立てば」までを序とするB説と考えることはできない。

手間のかかる特異な例のようだが、二章で挙げた㉔から㉖の例はすべて序詞を含む序歌とされており、当該歌と同じ手順を踏んでいる。特に①例は当該歌と同様に寄物陳思に属しているが、これを見ても掛詞となる語の双方が必ずしも解釈上強固な

万葉集二六七五番歌「立てば継がるる」について

つながりを持っていないことがわかる。これにより、序詞に關しても立ツから断ツへの掛詞による転換を提案することができると考える。

序〈三笠の山に居る雲の〉

立ツ

断ツ||断てば継がるる恋

①序〈齋くみもろのまそ鏡〉

掛ク

懸ク||懸けて偲ひつ

おわりに

万葉集二六七五番歌は、従来「立てば継がるる」という訓みのままで「雲が立ち昇つてはまた湧き出るように」といったあまいな解釈がなされてきた。そこで問題視されながらもそのままであった「立てば継がるる」について、掛詞による言葉の転換によつて疑問を解消できると考え、条件表現、表記、序詞の各面から検討を加えた。その結果「タテバツガルル〔立者継流〕を「立ツ」と「断ツ」との掛詞であるとなすことが問題解決の一つの方法となるのではないかと考えた。

以上のことをふまえ、一首の解釈を試みる。

先に述べたように立ツと断ツとの解釈上の関わりはないもの

と考えられるため、この歌の核となる部分は「断てば継がるる恋」となる。

また「恋もするかも」と歌った例は万葉集中いくつも見られるが、いずれも恋の良し悪しにかかわらず程度の強さを表す表現のようである。

⑨ 貌鳥の間なくしば鳴く

春の野の草根の繁き恋もするかも（卷十一・二八九）

① 庭清み沖へ漕ぎ出る海人舟の

楫取る間なき恋もするかも（卷十一・二七四）

⑨は春の野に草がびつしりと茂っている様子から、また①では海人が休むことなく船を漕ぐ様子から絶え間ない恋心を表したものである。したがって当該歌も自らの意思で断ち切ろうとするにもかかわらずまた続いてしまう恋心の強さ、その苦しさを表現していると考えられる。そこで最後に次のように解釈を示して終わりたい。

（君が着る）三笠の山に雲がかかっている。雲といえば立つものであるが、いくら断ち切つてもまた自然と続いてゆく、そんな切ない恋を私ははしているものだなあ。

（おやま なかば・修士課程二年）